

---

---

## 人間原理芸術学の観測点としての『涼宮ハルヒの憂鬱』

三浦 俊彦 (東京大学)

---

---

人間原理 anthropic principle は、「物理定数の微調整」の謎を「観測選択バイアス」によって説明する。多様な環境のうち例外的に知的生命(観測者)を生み出したローカル条件が、観測者の目には「実在全体の普遍法則」のように映る。よって普遍性を求める理論科学は、錯覚を補正するために環境科学へ還元されねばならない。あらゆる自然現象の中で知的生命は最も精妙な環境条件を必要とし、宇宙の組成に低確率の制約を課すのだから、最も情報価値高き研究対象は観測者自身なのだ。——人間の主観的意識を軸とするこの科学方法論は、まさに人文知に定位した論理であり、個と普遍の関係への哲学的再考を促す。とりわけ芸術学には「特殊事例の認識が一般理論にどう関わるか」という問いを改めて提示するだろう。

上記課題への応答を探るうえで格好の事例として、メディアミックスSF作品『涼宮ハルヒの憂鬱』に注目したい。理由は二つ。①作中で人間原理が解説され、自我体験、神義論など、人間原理的テーマに沿って物語が進む。②自意識の対象化を煽るメタ芸術的仕掛けに満ちている。

本発表は、アニメ版に顕著な②の諸特徴を中心に考察する。たとえば、時間ループという物語内出来事を再現すると称して毎週同じエピソードを放送し続けた「エンドレスエイト」(知覚的快樂の遮断)、原作小説の総ページを5等分して各々放送一回分に機械的に割り振った「涼宮ハルヒの溜息」(媒体固有性の否定)など、娯楽芸術の常道を外れた過剰な実験性は、ファンの失望と怒りを買ひ、視聴率および収益の低落を招いた。鉄板コンテンツの商業的成功を当事者が故意に潰した事件として、アニメ史の超常現象とも言えよう。

『ハルヒ』は本質的に娯楽芸術ではなく、表現本位のモダニズム芸術や炎上狙いの参加型アートですらなく、CA(コンセプチュアルアート)の傾向が強いと考えられる。アニメをCA視するのは、制作者のカテゴリ意図と衝突しかねない再評価法だが、『ハルヒ』に限っては、ジョン・ケージ作品との数秘的対応が埋め込まれている等の内在的傍証により、CA視は十分正当化される。のみならず、ハイアート固有のCA戦略をポピュラー芸術にまで暴力的に拡げた結果として、芸術全体の範囲で自己対象化が演じられ、従来のCAからは想像できなかった多くの新しい効果をもたらした。

種としてのCAは、受容可能性が危ぶまれるべき理由を有しながら、芸術史の自然な帰結としての認知を享受している。本発表はこの矛盾を「微調整の謎」と類比的に捉え、観測点の選択確率がCAに偏るという人間原理的事実によって説明する。CAと観測選択バイアスとの相関は、CAの多様なポテンシャルを具現した特殊事例によって裏付けられるだろう。すなわち芸術学の人間原理的再構成とCA研究とは、同一課題の表裏に他ならない。そのことを例証する理想的な作品が『ハルヒ』であることを、同作品の分析を通して明らかにする。